

諏訪大社関係の「磐座」を見学して、・・・・・・・・

伝承の裏を探る

はじめに

まだ日本とは称してもいなかった弥生時代に、中国では「現日本人が居住している」と認識していた。我々が今云う「弥生時代人」が「倭人」であり、別の見方をすれば「隼人族」（建内宿禰の子・九族を含む）でもある。

日本の歴史の中の「神代時代」が「弥生時代」で、欠史十代と云われる天皇の頃が古墳時代の始まりに相当する。

古事記

大国主神（八千矛神・大穴牟遲神の名で書かれている場合も）は高志国（越国）の沼河ヌナカワ比売を娶る。（建御名方神が生まれたとは書いてない）その他に娶った女神は、胸形の多紀理タキリ毘売（有名な子は阿遲組高日子根アジスキタカヒコネ神）、神屋楯カムヤタテ比売

（有名な子は事代主神）等十数柱の女神と国譲り交渉のため、天照大御神は建御雷之男タケミカツチノヲの神を出雲の大国主神のもとに派遣、事代主神は服従したが、建御名方神は抵抗するも結局科野国（信濃国）の州羽（諏訪）まで逃げて「この地を除きては他處に行かじ」と命乞いをして服従した。

信濃での伝承

①塩尻市北小野字頼母タノモ小野神社（こ祭神は建御名方命）社伝によると「建御名方命は信濃に來たが諏訪には洩矢モレヤ神が居たので入れず、暫く小野の地に留まってここを統治したのでここに祀られた」 諏訪神社系の鉾・鉄鐸の祭器がある。 冶金族か。
②上伊那郡辰野町小野字矢彦沢矢彦ヤヒコ神社（こ祭神は大己貴命・事代主命） 副殿のご祭神が建御名方命と八坂

刀女。小野神社と同じ伝承。①②の神社は、行政区は違っても近距離に並んで建っている。
①②を合わせて信濃国の二宮と云う。

【茅野で確認した、建御名方命到着以前から諏訪に居た神（部族）は守矢モリヤと伝承されていた。諏訪大社のご神体山も守屋山だった。塩尻から辰野に南下して、そこから北上して諏訪湖に至るコースがある。湖畔の岡谷市には「洩矢神社（こ祭神は洩矢神）」が鎮座し、「建御名方神が諏訪に侵入した時、地元の洩矢神は建御名方神に敗れた。」との伝承があり、「モレヤ」も「モリヤ」も同一言葉と推定出来る。】

私の古代地名語研究では【モの発音は自然銅を意味し】物部のモ。大物主のモ。出雲のモ。等の「モ」発音は、全て自然銅に関係している。【ヤの発音は冶金する】

ヤマトのヤマは山ではなく、マと云う金属（銅か）トと云う銅を冶金していた土地。

大和国平群郡や播磨国赤穂郡にはヤマ（夜麻・野磨）郷がある。

【リの発音は銅鉱石】播磨はハリ・マで、ハリの付く地名の場所には銅との関係が見られる。（奈良の針・愛知の尾張等）

勿論【ハの発音は銅を意味する】ので、ハタ氏族のハの発音も銅に關係する。

私の推論

古事記では「建御名方命が出雲から建御雷之男命に追われて、諏訪で降参している」としているが、諏訪の伝承では「モリヤ氏族が建御名方命に負けて、建御名方命を祀る」ことになっている。

私の推論は「天孫族が、大國主命（大己貴命）の支配地・出雲を得ようとしたら、新潟県糸魚川付近で力をつけていた息子の建御名

方命が抵抗した。追ってきた天孫族（建御雷之男命）から逃れる様に建御名方命は、同族の隼人系（ハタ氏族）の首長（モリヤ）が支配していた山奥の諏訪を訪ねて行った。だから、モリヤ氏が建御名方命を同族の遠祖として祭祀している。

何故「モリヤはハタ氏族系なのか」

諏訪の発音はスハで州羽・須羽と書かれている。【スの発音は錫の意味か】【ハの発音は銅】だから、諏訪湖周囲の山（溶岩山）から金属（銅・錫等）が取れていた事が推定出来る。ハタ氏族は吉備地方（岡山）では弥生時代には活動をしていた。

銅冶金が得意だから、茅野の地名の中にも「棚畑」の様にハタの付く地名とか、「鑄物師屋」（鑄物をしていた地名）大塩・塩澤（シオの発音は銅を意味する）山田（ヤ

マ・タで銅地名）緑（ミ・トリで銅地名）等銅冶金部族のハタ氏族が居たと思われる銅地名が多い。

会では、モリヤの姓に關係する「守屋山」の北麓で磐座（おふくろ岩）を探索した。鎮座している場所は谷間で、あの巨岩・擬灰岩は上から谷を落ちて来たものと思えた。見て判った様に、表面には

小さい穴がある。その穴の中に異質な金属（例えば銅）が凝灰岩の中に固まっていた可能性がある。お袋（オフクロ）岩と後世の人が呼んだのは、【フの発音は銅の様な金属。クロの発音は鉄の様な金属】の意味で、岡山ではミナギの地名を「美袋」と書き、倭名類聚抄の播磨国「三囊郡」をミナギ郡と読ますが、今は同じ字でミノウ郡と読まず。袋・囊フクロの字がナギと同意語で書かれている。

「ナギ」とは伊邪那岐命の「ナギ」と同じで、【ナの発音は成す。ギの発音は金属の一種】だから、あの岩から銅の様な金属が取れて

いた筈だ。更にあの巨岩には別名「船繋ぎ岩」（岩の上面に綱を掛ける凸部分があるからと去うのが由来）と呼ばれているのも、フナ・ツ・ナギの音味が【フの発音は銅。ナは成す。ツの発音は青銅か。ナギの発音はフクロと同じ】で銅冶金に關係する。「諏訪湖の水面がそこまであった」と云うのは後からのこじつけだ。

この様な銅・金属を含む岩が守屋山の頂上付近には多くあったから、モリヤ山【モの発音は自然銅。リの発音は鉱石。ヤの発音は冶金する】と山の名前にもなった。

モリヤ山は銅冶金族の大切な場所だから諏訪大社のご神体山と称されている。が、大社の反対側（旧高遠町）には麓に守屋神社が鎮座するし、守屋の姓が電話帳には95軒（合併した伊那市全体では116軒）もある。因みに茅野市では守矢姓が34軒・守屋姓が136軒。併せて169軒は市全世帯約16、000軒の1%。諏訪市では守矢姓が16軒・守屋姓が

48軒、で0.5%になる。守屋山の両側に居て山を冶金の職場にしていた同部族は、高遠から茅野に越す峠を「杖突峠」と呼んだ。

【杖を突いて越した峠】と地名考をしているが、「ツキ」の付く発音の場所（高槻市・各地にある高月・吉備の榑築タテツキ墳丘墓・京都の綴喜ツツキ郡等）はハタ氏族が関係している。神代の「月読ツキヨミ神」がハタ氏の遠祖で、京都の月読神社（ご祭神は月読神）とハタ氏が祭祀する松尾神社との間には深い関係があった。吉備（岡山）にも守屋姓はあって、衆議院議員の方・岡山市長の方もおられた。

大社に参拝して、拝殿を通して拝むのは「モリヤ山」ではない。拝む拝殿の先（1.5キロ）には前宮が鎮座している。その一番大切な場所が「神殿」で、シンデンとは発音せず、コウデンと発音する。吉備には「コウ」の発音の場所が多い。

井原市の端に高山（コウヤマ）地名があつて銅鉾山がある。笠岡市に神島（コウのシマ）があつて明治時代に銅精錬所があつた。

岡山市東部に江戸時代に埋め立てられた幸埼（コウサキ）・幸西（コウザイ）の地名の地域があるが、丘（旧島）にはトバ・クラカケの様な銅地名がある。岡山市の金甲山（キンコウザン）のコウも山頂に磐座が残り金属・銅かも知れない。県西部の備前市に鎮座する式内社「神根コウネ神社」は、旧吉永町中原に鎮座する。中原の地名はハタ氏の居た地名で、近くにハタ稲荷大権現も祀られている。コウネのコウとはハタ氏族の銅言葉に関係がある。

銅が取れていた場所に祭祀殿を建て、コウ殿（神殿）と称したのではなからるか。だから磐座（御座石・硯石・御杵石）に囲まれた場所に新社殿（本宮）建築の場所を決めても、銅冶金のコウ殿の場所が基だったことになる。

弥生時代、形式は色々だが銅鐸は出雲・吉備から東海地方まで造られていた。銅冶金技術を伝承したハタ氏族だったかも知れない。吉備の中原に居たハタ氏族は、中原の磐座の本に出ている豊橋市二川東方の「立岩稲荷神社」の磐座（中原の地名がある）までは確実に来ている。隣の浜名湖から天竜川を遡上すれば伊那・諏訪に到達出来る。

一方、出雲を始め日本海沿岸に伝搬している「四隅突出型墳丘墓」は、吉備で始まったと云う説（三次で出現）もある。吉備の「特殊器台」も出雲でも出土している。神武天皇が東征の時、吉備のハタ氏を連れて大和へ進んだことは、吉備の「特殊器台」が埴輪に変形している事実で明らかだが、天皇大和に到着後、大和地方で妃を探さず、ハタ氏の居た現高槻市の三嶋の姫沼輪五十鈴姫ヒメタタライズヒメ命（日本書紀では事代主命の娘と云う）を娶っている。ハタ氏

の盤踞地に事代主命が居たと云う伝承が、吉備と出雲とが親戚づきあいを推定さす。こうした関係で、出雲系の建御名方命が、諏訪のハタ氏系のモリヤを訪ねて糸魚川から逃げだしたと推定出来る。

評訪大社には御柱の伝承が続く。境内の四隅に建てるのだから囲まれた中に悪霊が侵入しない様に除霊の儀式だろうが、建御名方命やモリヤの伝承は弥生時代の終末期・古墳時代が始まる直前の頃。縄文時代の巨木を建てていた遺跡とは時代が違いすぎる。始めた起源は不明だが、後の世の「結果石」「榜示」に繋がるものだろうか。想像力豊かなハタ氏族の発想であればうれしい。